

康熙朝的水利工程

張紹好

哪個朝代，農業都是國家經濟命脈，因此防治水患與興修水利皆為各朝重視的國家政策，因為它直接關係到國家農業的興衰，經濟的發展和社會秩序的穩定，清朝當然也不例外是個以農業為主要國家財政來源的農耕社會國家。清朝初期由於經過長期連年的戰亂，農業生產遭到嚴重的破壞，民生凋零，連帶強烈影響到國家的財政收入，社會經濟的發展和民生的安定。

清朝的第四位皇帝，入關後的第二位皇帝，聖祖仁皇帝 愛新覺羅 玄燁（1662－1722）即康熙帝，八歲登基，十四歲親政，是中國自秦始皇以來兩千年間的偉大君主之一，也是中國在位六十一年時間最長的皇帝。康熙帝深知自宋以來南糧北調，漕運，河務對朝廷收入的重要性，在十六歲除掉結黨營私，欺壓幼主的輔政大臣鰲拜，削弱八旗旗主的權勢及二十歲開始，花了八年時間，浴血戰爭，平定朝廷東南大患，以吳三桂為首的三藩之亂，維護了王朝統一之後，立刻著手於逐漸實現早年一直牽掛在心，書寫于宮廷梁柱上的 三藩，漕運，河務自勉座右銘中後兩項的漕運，河務。

康熙帝認為增加國家歲收首重農業，發展農業首重河工（治理江，河等水利工程的總稱），黃河，淮河等的水患是令歷代各個王朝統治者都頭疼的治水工程，治水如果沒有一定的成效，將嚴重關係到國庫的財政收支和社會的發展及安定。除了派侍衛親沿黃河而上，至黃河源頭星宿海等地實地勘測黃河的來龍去脈，也將勘測成果繪出了中國第一部經過實際勘查後繪製的黃河全圖之外，又曾先後六次親自南下江南，巡查黃河和水利工程，且命河道總督靳輔，陳潢等人，用心修治黃河，淮河，永定河等的防水工程，確保漕運的順暢無阻，雖然受到當時科學技術水準的限制，但仍然取得了一些超越歷代河工的成效。

康熙朝水利工程的另一項成就，可以說是海塘，練湖等的修建和重整規劃，這

些工程有利地保護了東南一帶的大片良田沃野免遭海潮的侵襲，它們經過長期的休養生息後，原本因戰亂荒廢的土地又都開始栽種了糧食和各種各樣的農作物，穩定了社會經濟的來源，充裕了國庫的銀兩，奠定了清朝興盛的根基，開創出康熙盛世的大局面，鞏固了中國多民族統一的國家廣大的疆域。

本篇文章以康熙朝時期的水利政策和諸問題為主要研究對象，
參考資料如下

明史 明實錄 清史稿 清實錄 康熙起居注

清代康熙朝の水利工事

張紹好

中国では、古より現代に至るまでいずれの時代においても農業が国家経済の命であった。そのため、防災と水利工事とが、各王朝の最も重視した政策であった。それは、これらが、国の農業の興廃と経済の発展及び社会秩序の安定に直接関係していたからである。清朝も勿論例外ではなく、農業を国家財政の根源とする農業社会国家であった。清朝初期には、長く続いた戦乱の為に、農業生産は甚だしく破壊されており、人々の生活は窮乏し、それは国家の財政収入と社会的経済の発展、民生の安定に強く影響していた。

清朝の第四代皇帝、入関後の第二代皇帝、聖祖仁皇帝愛新覺羅、玄燁（1662—1722）即ち康熙帝は、八歳で即位、十四歳で親政を行ったが、秦始皇以来二千年の後を続く偉大な君主の一人であり、在位期間最長六十一年の皇帝であった。彼は宋代以後の南糧北調、漕運、治水が朝廷の収入に対して持つ重要性を深く認識していた。十六歳の時に、党を組み私利を図りかつ自分を押さえつけていた輔政大臣の鰲拜を除き、八旗の旗主の権勢を削いだ。二十歳の時から八年をかけて、東南の大患であった呉三桂を中心とする三藩の乱を平定して、王朝の統一を守り抜いた。そして、すぐに、宮中の柱に書いていた

他の二つの悲願、即ち治水と漕運の事業に着手した。

康熙帝は国家の歳入を増やすには、まず農業を最も重視すべきであり、農業を発展させるには、まず治水が第一であると考えていた。黄河、淮河などの水害は歴代の統治者が皆頭を痛めたものであり、治水がうまくゆかなければ、国家財政の収支、社会の発展と安定に大きく影響を与えていた。康熙帝は近侍の臣を派遣して、黄河を遡ってその水源の星宿海等の地にまで至らせ、黄河の流れを実地に測量させ、その成果を中国史上初めての黄河全図として完成させた。また、前後六回、自ら江南地方へ下り、水利工事を巡察した。彼は河道総督靳輔や陳潢らに、黄河、淮河、永定河等の防災工事と順調な漕運の確保に注意するように命じた。当時の技術的水準の制約はあったが、前代までの治水を越える成果をあげることができた。

康熙朝の水利工事のもう一つの成果は、防潮堤の建設、補修と練湖の再生である。これらは中国東南部の沃野が海水の害を受けないようにしたし、長い休耕の後に穀物その他の作物を植えることができるようにし、社会経済を安定させ、国庫の収入を増やした。そして、清朝隆盛の基礎が固められ、多民族統一国家の広大な国土が定まったのである。

本研究は現在進めている康熙朝期の水利政策とその諸問題を対象としており、資料は主として以下のものを使用している。

参考資料：明史，明實錄，清史稿，清實錄，康熙起居注